

〔研究ノート〕

## 今西錦司『生物社会の論理』から： 学説とその検討 (1)

森 誠 一

はじめに

- 一. 『生物社会の論理』の論理
- 二. 社会としての種
- 三. 複合同位構造と階級社会 …… (以上本号)

はじめに

今西錦司 (1902~1992) は 20 世紀をまさに世界的規模で自由闊達に生き、わが国の生態学や進化論という自然科学の一分野のみならず、生物の世界観や自然観の展開に多大な影響を与え、思想界においても少なからぬ位置を占めてきた。しかしながら、これまで今西を扱った論稿の多くは、晩年のダーウィンの自然淘汰説からなる進化論への反駁や山登りをする知識人としての人を魅了する言動に対するファンのような要素が強いものであった。真摯に彼を批判的に捉えて論じたものはきわめて少ない。それは彼が亡くなって数年、以前にも増して無視されている状況を見ればわかる。このことはわが国の科学界の通例であるのかもしれないが。

言うまでもなく、ある思想や学説が葬られるのは、それが別の思想や学説によって葬られるときだけだ。肉体の死という単なる状況が彼の思想や学説を葬りつつあることを拒否して、後進の我々の手で真摯に彼を検討する作業

が続けられなくてはならない。ここで私は今西の学説を礼賛するつもりもないし、また逆に後世からの身勝手な批難をするつもりもない。またさらに、右翼的だとか戦争に荷担したのではという憶測や利己的な想念だけで、彼を全く顧みないという怠慢に安楽するつもりもない。私は本稿で、彼の1950年代の最もオリジナリティに優れた学説を中心に、現代的意義を論じて今後の狭義の生物学という一分野のために、その位置付けを行なおうと思う。ここでは今西の主著たる『生物社会の論理』を中心に祖述して、その位置付け作業を行ないたいと考えている。

## 一. 『生物社会の論理』の論理

『生物は、無生物——生物以外のもの——とともに、この世界——われわれが感覚し、経験し、生活している、この地上の世界——の構成要素である。—中略—

生物がこの世界の構成要素であることは、まちがいないとして、つぎに、生物のこの世界における在り方であるが、このじつにいろいろな生物が、この世界に、あるいはこの地上に、でたらめにばらまかれているのだろうか。それともそこには、一定の秩序なり、法則なりがあるのであろうか』

という反問で始まるこの『生物社会の論理』は、今西錦司の基本的前提である「生物の世界における秩序」の存在証明が根本的発想となっている。生物の世界の構成に加わっている究極的な単位としての“種”を明晰にし、生物的自然における現実的、具体的な姿を考察することが、『生物社会の論理』の主要なテーマである。本書において、今西は生物種における社会性を詳論するが、“種社会”内部に関する部分は少なく、もっぱら、種社会そのものの独自性を論ぜんがために、種間関係に視点が重く注がれている。それは、

太平洋戦争を前に遺書のつもりで書いたという『生物の世界』(1941年)の視点(森, 1987~1988)とはかなり異なり, より生物学的具象を題材にして革新的に展開している。

しかし, 種は生物世界の構成単位としてあるだけでなく, 系統によって一定の秩序が存在している。すなわち, それは進化ということであって, 種と種との間の歴史的関係(繋がり)であることに他ならない。「生物の種と種とのあいだに, 進化の段階に応じて, 序列をつけることができる」のである。そして, 最初, その作業は分類学として, ある生物的自然を設定し, その中の「種名を系統学的に整理配列する」目録作りといった種類相という一面のみを捉えていったにすぎなかった。

そこで「各地の種類相をくらべて, 相似た種類相を呈する土地をひとまとめにし, 相異なる種類相を呈する土地と対立さすことによって, この地上をいくつかの生物地理区にわかす」生物地理学が誕生した(この学問は, C. Darwinの『種の起源』*The Origin of Species*, 1859や, R. Wallace『動物の地理的分布』*The Geographical Distribution of Animals*, 1876から始まったということができる)。

だが, 一人の学者が生物の全種類を分類し, その分布を区分けしていくことは不可能である。しかも, 学として発達すればするほど専門細分化していき, 「生物地理学」というのでなく「動物地理学」になり, さらに「ネズミ科の地理学」というふうになっていく。そして, 結局, 地理区を画する境界線は学者によって相違するというほどになる。材料のちがいがから, いろいろな地理区や境界線が提出されてくるためである。例えば, シベリア亜区と満州亜区の境界が, 日本のどこを横断するかという論争——ブラキストン線か八田線か——は, 一方は哺乳類, 鳥類を, 他方は爬虫類, 両生類を対象としている以上, 伴にして論じることはできないものであり, そのいずれもが正しいものである, と今西は断を下す。そのひとつひとつの地理区分は正しいといえるが, それを絶対唯一の区分法と考えるとそれ自体に問題がある。すなわち「すべての生物にあてはまる分布境界線」は存在しえないこと

を論じるのである。

これは今西のもつ、種を平板的に理解することへの否定の表われであり、後述する群集概念への懐疑批判にも連なっているものである。複数の種が等しく分布を同じうすることはありえない。この考察は自然の真のあり方を執拗に追求し、実際の自然の中で体験してきたことにも基づいていよう。標本や図表などで生物的自然を観ていると、その種の有様が平面的に且つ非独立的に考えられがちになると思われる。それはある一定区域に生活する全種類を集散的に扱い、閉鎖的なひとつの体系とする見解を生起することになる。しかし、実際の自然の姿をダイナミックに観続けている今西には、生物的自然というものが、種社会を基軸にして、一つの生物全体社会を構成している秩序ある体系と感得されているのである。

次に今西は、生物地理学の一派であるメリアム (C.H. Merriam) を創始者とする生物分布帯派に言及して、それが生物分布帯 (life zone) による動物と植物の統合性を図ったことと、「垂直分布と水平分布との対比を明らかにし、同じように取りあつかえるものには、垂直分布帯に対しても水平分布帯に対しても、同一の名称を用いる」という点に、その進歩と価値を認めつつも、「種類相という一面にのみ立脚し、すべての生物の種類が同価値的な単位と認められている点」を指摘し批判している。種類相にのみ立脚する方法は、分類学的種名の目録的な羅列（確かに、系統的な関係は明確にするが）に終わるだけで、実際の生物的自然にある同種内、異種間の関係や環境との相互作用などを網羅できない。それでは「すべての種が同価値的な単位」（この「同価値」とは生存上に優劣があるとか、ないとかいう意味ではなく相違性の問題である）となって、生物社会の構造が明晰化できない。つまりは、構成単位としての種がすべて一元的な、且つ抽象的な概念を有するものにすぎなくなるのである。

この「同価値的な単位」としての種に対する批判を、種間の「優劣の差別＝種それ自体の存在意義の優劣」の主張と解してはよくない。『棲みわけ』を原理とする今西社会学は、そこに食物連鎖による段階の差異や、その種の存

在そのものの優劣を論じているのではなく、種はある地域でのみ生活の場として適し分布し、優占的に広がりうるものであり、他の地域(あるいは他の季節)では非優占的になるという相対的な存在総体であることを説く。種はそれぞれ、自然の中でそれぞれの生活形に応じて、それぞれの生活の場で生活しているものである。それゆえ、広く分布するものもあれば、局地的で散在しているものもあろうし、また、一時的に拡大あるいは狭小化したりする種の分布の有様もあるであろう。種はそれぞれ互いに異質であり、自然に占める位置も相違している。そして、それらの種の間には一定の秩序をもたしくみ、構造が保たれている。逆説的にいえば、すでに百万種とも二百万種ともいわれている生物種が、何の秩序構造もなく維持し続けることができようはずがない。多様ゆえにこそ、秩序構造が必然なのであり、そのようなものとして生物的自然は形成されてきたのである。そこで、今西は、種間における相似と相異を対比しつつ、種を基本的単位とする社会構造論を組み立てんとする。

同価値的に種を扱った生物地理学に対し、それが一面的で生物的自然の実相を示すものでなく、その人間がどんな人物であるかわからないまま名簿に載せて、名前や肩書きだけを問題にするようなものとして批判しながらも、その種を系統的な序列によって記述することに、一つの方法としての価値を評価してはいた。そこで、今西は生物分布帯派に類型主義の徹底性を主張する。「この地上における生物の種類相はでたらめなものでなくて、その組み合わせにかんして、いくつかの類型が認められる」と述べ、

「類型という以上は、一つの理想型を意味する。類型相の類型といった場合、それはかならずしも現実の、すべての生物の種類をふくんだ種類相でなくともよい。そのなかから、いくつかの重要な種類をえらび出し、その組み合わせからなる種類相をもって、一つの代表的な種類相を認めるならば、それがすなわち種類相の類型化である。

それでも類型である以上は、二つの対立的と認められる類型と類型とのあいだには、そのいずれにもあてはまらぬような、移りゆきの部分ができってくるのであろう。じっさいには、類型的、標準的な種類相を示す地域の周辺部に、類型的でない標準的でない種類相を呈する地域が、多かれ少なかれつづくのである」。

そして、一方の類型化された地域と、もう一方の類型化された地域とは直接に接続しなくなるといえ、境界線は類型の地域からみれば、非類型的な部分に引かれることになる。しかし、実際の分布帯派はやはり地域主義をとり、境界線を設定することに執着し、そのため「地域指標種」という考えを持ち出した。接続する分布帯の両方を比べて、互いに重なり合わないような種を選び、それぞれの分布帯の地域指標種とするというのである。もちろん、今西はこの指標種に対し、相接続する両分布帯の種は多いが、それらの接続点が一本の境界線上にならないとき、どれを選ぶのかということが不明確な以上、有用な方法とはいえぬと痛打している。

そこに、種を同価値的なものとしてのみ扱う生物分布帯派の限界があるとする。種それぞれの生活様式の比較をさほどせず、種が違うという形態的な側面からのみ視点を据えるため、生物的自然における種がすべて同価値的、同意的であるという結論を案出してしまったのであった。そして、系統的な分類学上の現在ある種間の関連付けはできても、生物地理学は実際の複雑な生物的自然を正確に記述しているとはいいがたいのである。そこで、その目録的な性格に対し、「自然に即して観察し、そのありのままを記述する」ナチュラルリストの批判が現われ、彼らが生態学の先駆的働きをしたということが表示されている。彼らナチュラルリストは、分布帯派らと違い「自然における生物のあり方」が、「一種類ずつ、系統順に、お行儀よく並んだりはしていない」ことを実感的に知っていたことを、今西は高く評価する。

かといって、それは自然が無秩序で、出鱈目であることの主張を意味しない。「無秩序とか混乱とかは、人間が自然を破壊したあとにこそ見うけられ

るのであって、ありのままな自然においては、森林であれ、草原であれ、それ自身が一つのまとまった、自然景観の要素をなしている」のである。種類相という種名の列挙に終始し、系統図を描くばかりで、実際のその生活を無視した、抽象化された種のみを扱う生物地理学の要素主義的な面に反意を示すのである。

ここで、生物のまとまったあり方を表わすものとして、集合的で景観的要素によって整っている植物的自然が、ナチュラルリストの基盤となり、生物的自然観の土台になっていったという。そして、ここから植物共同体といった見方をもった初期植物生態学が発達してきた。つまり、不連続で散発的で非定住的な広がりをもつ動物と違って、森林や草原といった景観的にも明確に峻別できる植物集団を抜き出すものとして、植物生態学は始まったのである。

初め、植物生態学は景観的識別によって、植物的自然を区別、分類していた。が、同じ森林といっても、針葉樹か広葉樹か、広葉樹林でも常緑樹か落葉樹か、さらに落葉広葉樹林でもブナが主か、ナラが主か、というふうに結局、「種のちがいにまで還元され」てしまうことになる。そこで、ある地域内で最も個体数の多い種を選び、それを「優占種」としてこの組み合わせによって、その種類相を代表させることとした。この優占種による一種の類型化によって（ある地域のすべての種類を取りあげ問題とするのではない）、「ブナが圧倒的に多ければ、その範囲に認められる森林を、このブナ型によって代表をし、ブナ型の森林と認める」ことができる。

しかし、現実の学界はこの類型化の方向へは行かず、生態学者の多くは、植物共同体を実体的なものとして看做した見解を進めていったのであった。

「植物的自然とは、植物共同体がその構成単位となっている。なんらかの植物共同体として表現できないような植物的自然というものはない。そういう意味では一つ一つの植物共同体が、一本一本のブナやナラの木に相当する。一本一本のブナやナラが、取りだそうと思えば取りだせるように、植物

共同体というものも、取りだそうと思えば取りだせる、植物の集団的な、あるいは社会的な単位である。一本一本のブナやナラと同じように、植物共同体というものも一つの閉鎖体系である」という考えが、植物共同体説をとる植物生態学に含まれていると今西はいう。植物共同体はある広がりをもった植物集団をいうのであるが、今西はそれをいかにして区分し、また、地域的なひとまとまりとして明確にする方法があるのか、さらに、本来そのようなものが生物的自然界に実在するのか、と問う。Plant Community を集落と関連付けるかのごとく「群落」とも訳したように、ある区域内で複数の種類が、言いすぎれば有機的關係を保ち、一定の定まった閉鎖性があるという植物共同体説は、一面をのみ強調したものと論難するのである。

ブナ林とナラ林との中間に「ブナとナラがともに優占的な部分がある」とき、それを「ブナ＝ナラ型の森林」と認めるかどうか問題となる。が、植物共同体説では認めざるをえないことになる。しかし、現実にこれが閉鎖体系として形成されていないことは明白であるため、「単位集団として取りだせる」ことはできない。そこで植物生態学はそのような場合、「優占度はたとえ低くてもよいから、この中間帯に限って見出されるような他の植物を探し出し、「この分布限界をもって、ブナ＝ナラ型の森林の分布限界と見なし」、これによって植物共同体として、閉鎖体系をもったもののごとく解釈した。そして、この植物を「標兆種」としたが、これは推移帯を問題にした生物地理学が提唱した地域指標種と異ならないと述べ、前車の轍を踏んでいると、今西は結している。

標兆種などというものは自然において、いつも都合よく得られることもないだろうし、さらに、生態学は類型主義的な総合化という方向とは反対の、ブナ＝ナラ型の森林を認めていった。そのため植物共同体の単位に、「種類相、立地もしくは環境、景観もしくは外観の三点にわたり、現実的にできるだけ均質な集団を求めようとすればするほど、集団はしだいに細分され、単位としてとり出される植物共同体は、しだいに小さな、局地的なものとなっ



た」のである。今西はこの類別のための類別を批判しつつ、細かい植物共同体を区別し、その存在を明らかにしていくことを新種発見の意味と同じようにして、一つの発展として認めてはいる。しかし、今西は植物共同体の細かい区別が進められた結果生じた小地域的局地的な共同体と、大域的で優占的な共同体との関係を整理配列する方法が、生態学に用意されていたかと詰問する。生物地理学のように種を中心に扱うことで、系統的な序列に従って記述する、というような方法をもっていたかと。

すなわち、分析し細分化していくことはそれはそれでいいが、それだけでは意味がないというのである。一つの共同体の細かな特徴を見分けて、他の共同体と区分していき、その部域だけを論じるだけでは、初期生物地理学的な「京都府生物目録」を作るといったように、他との関係や、その生物的自然に占める位置が明確にならず、さらに生物界の秩序が皆目、理解できないというのである。ここにも、今西の「生物（全体）の世界」を考察するダイナミックな構造論的態度がうかがわれる。共同体による区分は最終的には、種の相違に帰着することになるが、それは一種の生物的自然の緻密化、分析化として一応認めることもできる。そのように、共同体の細分化に一定の意味を見出してはいるが、今西にとって、より重要な論題は、その共同体（もしくは種）間の関係付けであり、つまりは、構成する基本単位が形作る生物世界の構造なのである。

植物共同体を体系付ける理論、今西はそれを、F.G. Clements によって大成された遷移 (Succession) 学説であると自答する。彼は遷移学説について、「ある一地方——それは森林地であっても草原であってもよい——に、いろいろな種類の植物共同体が見いだされるとする。そのいろいろな種類のなかで、一つだけは、その地方において、気候変化のないかぎり、そのままの状態を持続して変化しないけれども、その他のものは、いずれも変化の途中にあるものである。しかし、かりに長年月をもってすれば、これらの変化の途中にあるものも、みなある状態に達して、もはやそれ以上には変化しなくな

るのであって、その状態というのを「極相」(Climax)とした、とまとめている。

そして、この極相を「いろいろな植物共同体のちがいを、一種の発達段階のちがいとみて、その相互関係を、発展段階的に整理し、発展段階的に体系づけようとしたものである。したがって、極相共同体とは、その地方において、最高の発展段階に達した植物共同体のことである」とし、第一に気候がその発展段階の限界を規定するものと解している。ツンドラ、ステップ、タイガ、シルバなどは、「その気候にして変わらないかぎり、その地域において、それ以上には変化し発展しない植物的自然」なのである。

同じ気候下で森林と草原が並存する場合、森林の方が発展段階が高く、極相であるということになる。つまり、「より大型な植物の集団を含む共同体のほうが、支配的」なのである。草本が森林内にあっても、森林外に草原としてあっても、森林が成立する気候下にあるとき、草本は非優占的立場となり、発展段階の低い植物的自然となる。すると、「遷移がすすむほど、初期の段階にある共同体の数が減って、極相共同体の占める部分が広がる。そしてついには、全地域が極相共同体によって占められる。そこにおいて、その地域の植物的自然のすべてが、完全にその気候とつりあい、安定する。その意味において、極相とは、また安定する。その意味において、極相とは、また安定相でもある」という説明がなされる。

また、気候帯が同じであっても、山地と平地、砂丘地と泥炭地における種類相の相違は、同一の極相になっていくのか、という問いに対し、「山地といえども、かりに長年月をもってすれば、浸食がすすんで、いつかは一個の準平原化するときがあるであろう」として、結局は単一の極相共同体が出現するはずである、というふうにクレメンツの学説を解している。そこに、今西は遷移学説が地質学の地形水準化説の影響を多分に受けていることを、やや懐疑的口調で指摘している。

そして、今西は、動物生態学が共同体説を中心とした植物生態学の方法を

受け継ぎ、動物共同体なるものを、「実在的な、動物的自然の構成単位として、一つの閉鎖体系をとるもの」と考えたとき、その追従性を批判的に述べる。動物共同体の限界は植物共同体の限界をもって扱い、生態学において、「植物的自然というものが、動物生活にとっての重要な環境を構成するものである以上、動物共同体の限界を規定するものとして、それは単なる植物共同体ではなく、環境としての植物共同体」であると、植物と動物とのそれぞれの共同体の関係が位置付けられている。

だが、ここで動物生態学が対象としたのは、昆虫のような小動物であって、それによって植物共同体との一致を見易くしたのであった。そこで大動物について考慮する必要があると、今西は主張する。とすれば、哺乳大型動物はいくつもの植物共同体にまたがって、移動し、分布していることを念頭に置かねばならない。つまり、動物共同体の広がりがあり、対象とする動物によって大域的にも、小域的にも扱われることになるのである。今西は「いったい、どちらをとるべきであろうか」と問うが、すでにこれは共同体などという動物相の集団のまとまりなどの問題ではなく、種の問題に帰趨する。すなわち、生物種の分布などというものは、それぞれの種がそれぞれの分布をし、一致しえない以上、植物共同体と動物共同体が同一になりえないばかりか、動物共同体というものも頗る曖昧なものとなる。そのため、植物生態学におけるのと同様に、動物の場合も「より広い生活環境を要求し、より広い生活環境を占拠するものほど、より優占的である」とし、昆虫の個体数がいくら多くても、大型哺乳動物を優占的と看做すことができるとした。このような優占的な種を、動物においては「優越種 influents」といい、動物共同体はこの優越種によって規定されるのである。従って大型動物を優越種動物とすることによって、「植物共同体と一致しない別な動物共同体が見いだされる」ことになる。

ここには環境としての植物から、動物が独立しており、別の体系をもっていることが示されている。植物共同体を閉鎖系と考えたように、動物共同体

も一つの閉鎖系とし、それをそれぞれの植物共同体の限界によって、その限界も定めようとした、初期生態学の大きな見落としを補わんとしたものであった。つまり、植物生態学の原理を、殆んどそのまま動物にあてはめ、動物生態学が成立したことにおける欠点を、是正したものとはなっていたのである。

初めに提出された植物共同体に包摂されて考えられた動物共同体は、しばらくするとその間での不一致が露わとなってきた。つまり植物生態学はその共同体に動物も含めた閉鎖的な統一体系を図ったのである。しかし、動物が植物共同体に含まれて考えられない事象が、いくらでも示されるようになり、むしろ大型動物においては、複数の植物共同体にまたがって分布するため、動物の方がより広い土地占有を為し、植物共同体が包摂される姿となる場合も多くなったのである。すなわち、生物共同体なるものの非在がまず確定したわけである。

だが、クレメンツらは動物に植物を合わせて、一つの共同体を考え出そうとしたと今西は付記している。動物共同体と植物共同体との不一致は、生態学者を困惑させ、その結果、「大地域的な動物共同体に、植物共同体のほうを合わそうと」することになった。クレメンツとシェルフオードらは、それらを合わせた共同体をバイオームという概念で示し、提唱したのである。

今西は以上のように、種名のみを明白にし新種探しに終始した分類学や、「各地の種類相をくらべて、相似た種類相を呈する土地をひとまとめにし、相異なる種類相を呈する土地を対立さすことによって、この地上をいくつかの生物地理区にわかつ」という種を枚挙し、一定の複数の種をまとめて区分する生物地理学、及びその一派である生物分布帯派（動物と植物を同尺度で統一的に見、垂直分布と水平分布を比べ、同一のものを見出し、「生物地理学と生態学に結ぶものとしても重要」な立場をなしたという）、そして景観的要素として認められる集団を植物共同体とし、自然からとり出し分析していった植物生態学、それは優占種という語を生み、ついには遷移学説という地域共同体を整理配列す

るダイナミックな方法理論が大成された。さらにその植物生態学に追隨した動物生態学といった学史を通して、今西はそれぞれを史的観点から認めつつ、検討、批判し、自己の位置と立場を明確にする作業をしていく。具体的にいえば、分類学、生物地理学は、「種」を問題にし、その系統的序列を記述するが、種のあり方（生活形と生活の場の関係）を扱わない。今西はそれを「抽象化された種の取りあつかいに終始する、要素主義的な生物学」として難じている。

種を中心課題とした分類学に直接的な基軸をおく生物地理学は、なるほど一つの確固とした方法論（種の系統的序列によって記述するという）をもっているが、実際の生物的自然を表現しているとはいえ、ただ、ある地域にどんな種類がいるか（生活している、ではなく）という一面のみを捉えたにすぎなかった。それに対し、ナチュラリストを媒介に一過程としながらも、単なる種類の記載やリスト作りから離れた植物生態学が誕生し、「一つのまとまった自然的景観」を問題とし、その植物集団を植物共同体とする考えが持ち出された。それは広汎に受け入れられ、動物生態学に大きな影響を与えた。生態学は、ある一定の土地に他と明確に区別できる種の地域別集団を共同体とし、その区分を記述していくことであった。そしてその共同体は一つの社会的な単位として、閉鎖体系である、という見方があると今西は考えている。

今西は、その閉鎖的な「ある広がりをもつもの」という、結局は、境界線を論じることになる共同体説に反意を示すのであった。自然に即している景観を、生物のまとまったあり方として、その集合状態を地域共同体とおいた生態学は、優占種などによる「類型主義的な、総合化という方向とは、反対の方向をとった」ため、「類別のための類別」という細分化に陥ったのであったとする。さらに、地域共同体を体系付けるものとして現われた遷移学説について、詳論しながらも、その単一極相な見解と、地質学的悠久の年月を前提とする論拠に不満を表明している。

この第一章の「学史的素描」において今西は、分類学から生物地理学、そ

の一派とされる生物分布帯派、植物生態学、それに続く動物生態学に至るまで、それぞれの価値を認めつつ、それらの批判的検討の必要性を論述している。そして、そこで、それらの学説は単に批判されるものではなく、今西社会学が生まれるのに通過しなければならない前史、とでもいうべきものとして位置付けられるといえよう。

## 二. 社会としての種

『生物社会の論理』の第一章で、今西は、従来の学説を史的に位置付け、それぞれの問題点を指摘し、彼の社会論の前史としての論述を終えている。そして、その第二章「新しき出発」において、今西は、自らの研究成果をもとにして、種の実在性を明示しようと試みる。

まず、最初に「この地表上に認められたる生物的自然は、種を構成要素として成立している」と、種の実在性を認識の枠に入れる。そして、その種というものが全地表上のいたるところに分布していることは、ごく稀（人類はその稀の一つ）であって、多くの種は偏在的に分布していることを再確認する。それゆえに、生物種は地方、地域ごとという一つのまとまりによって、その組み合わせが相違していることになり、生物地理区や共同体というものの論拠となったのだった。

「しかし」と今西はいう。「こうした種類相のちがいは、もともと典型的にしか把握できない」こと。「それぞれの種に、はっきりとした分布限界があるということは、その種の、その地表上において、占めている地域がはっきりとしている」といえるが、単なる分布地域——つまり、その地域内に一様な密度で生息しているというような——は存在しない。種は自己限定的なその分布地域内で、「その種に属する個々の個体の生活をとおして維持されてゆく、一つの全体であり、それ自身として一つの完結された生活体」なのである。

今西は種のこの空間性をもって、構成する一つの単位として、種それ自体の構造と種間関係の構造、つまり社会性をみようとする。分類学的な歴史的、系統的な単位としてばかりでなく、社会的な単位としての種をも考え、それら両面とを兼ね備えてこそ、「はじめて種というものの生物的自然における単位性が、具体」化される、という。現存する種は、進化的および歴史的な過程の産物ではあるが、その結果としての構造をもって生活している、空間的、社会的存在でもあるのである。

ここで、今西は自身の基本的な考えである「生活形」について論じる。生活形が相同であるとか、相異しているとかいうことは、今西社会学の根本的な考察であり、棲みわけ原理などの自己の学説を構築していく上での土台となっている。その生活形とは単に、形態だけを意味するのではなく、「形態をとおして把握される、その生物の生活様式」である。それは、『生物の世界』で述べた「同じ種類の個体同士というのは、血縁的地縁の関係のもとに結ばれた生活形を同じうする生物である」というように、種の定義に用いられる重要な概念となっている。

生活形は種の成立を意味するばかりでなく、その相似たものを取り出すことによって、「種の上にそれらをまとめるべき、生物的自然の別な構成単位として」ある生活形グループが考えられるのである。その生活形グループは生態学的な共同体でも、ひとかたまりにまとまった集団でもない。それは社会学の立場からいって、科あるいは属レベルをもとにした、一つの「生活形社会」ということになる。「種とは、すなわち、同じ生活形をとる個体から成りたった、一つの社会である。あるいは一つの生活形社会である」。この個体レベルでなく、種レベルの生活形社会、つまり似かよったいくつかの種社会が集まったグループは、分類学的位階が種より上であるところの属に基づいた生活形社会となり、それは種社会から成り立った属社会ということになるというのである。

この考えを拡大していくと、究極、「生物全体社会」といった、ただ一つの“生物”という共通性をもった生活形社会というものになる。一旦、この全体像までを認識してから分類学的位置に従いつつ、例えば動物的自然と植物的自然とに分けることができるが、このとき社会学は、その生活形の相違に着目して「これを二つの生活形社会——植物社会と動物社会——に分析」していくことを要求し、原理的な一貫性を保持しえんとする。動物のさらに区分けされる個々の社会（「界」より低次の「門」や「綱」社会ということか）にとってみれば、動物(界)社会は全体社会となる。生物的自然は「一つの生物全体社会であり、分析によって取りだされた社会は、この全体社会の部分社会である」。動物(界)社会も生物全体社会よりみれば、一つの部分社会となるわけである。これは分類学的位階に応じて、全体社会と部分社会ということがいえる。昆虫社会は、カゲロウ社会やトビケラ社会からすれば全体社会となるが、動物社会よりみれば、一つの部分社会になるということである。全体社会や部分社会ということは、各階層関係において相対的なものなのである。

この、種を同じ生活形の個体から成り立つ社会とする種社会論からすれば、「集団生活をしようとする」と単独生活をしようとするのは、それは社会内の問題であり、一つの社会の組織の問題であるとするのは、当然の逢着であろう。集団生活にしる単独生活であるにしる、それはその種社会のそれぞれの生活様式の相違であるにすぎず、種が維持されていく以上、社会性は万有の種に存在し、それによって形成される種社会がさらに、属の、科の、目の、社会性をもたせ、分類学的位階のそれぞれに社会を成立させ、生物的自然を構成しているのである。

生活形が種によってちがうのは、種によって生活の環境、すなわち生活の場がちがっているからである。生活の場がちがうということは、種自体が感知する外界はその種だけの独自のものであることを示す。世界は一つであるが、それをいかに認識するかは、種によって相違しているのである。



「生物によって生活に必要な範囲の外界はつねに認識され同化されており、それ以外の外界は存在しないにも等しいということは、その認識され同化された範囲内がすなわちその生物の世界であり、その世界の中ではその生物がその世界の支配者であるということではなかろうか」(『生物の世界』)という命題がここにも脈々と続いている。生物種は、その自らだけの生活形によって限定された生活の場を、他種と棲みわけて、多様性を表出する。こうした今西の視座は、種は生活の場をいかにみているか、といったユクスキユル的生物観の問題にも、一脈通じることがあるともいえよう。

生活形の相違だけに着目するのであったら、分類学や生活史をみるだけで十分であろうが、社会学というからには、単に種個体の形態や生活様式だけでなく、個体間に生じる空間性をも表わすものでなくてはならぬ。すなわち、種社会を成立せしめる「地盤」——生活の場——を、確保しているという事象に論及しなければならない。ある種がいかなる生活の場に存在するのか、という実際の生物的自然状況に即して鑑みた考察である。

同一の生活形をもった個体が、一定の生活の場に存在することによって種社会は成立する。また、個体の「生活の場をつなぎ合わせたようなものが」、種社会の「そこに成りたつ生活の場である」のである。

敢えてくどくいえば、「形態」の研究は「種社会」における「種」の、「生活の場」の研究は「種社会」における「社会」の分析ということになる。つまり、生活形が形態とともに、生活の場をも意味するものであることから、「種社会」の分析とは、各種における生活形の関係の比較分析であるともいえるであろう。

「ちがった生活形をとおして分析された、二つのちがった社会——ただし位階を同じうして、お互いのあいだに包摂関係のない二つの社会——は、それぞれに、それにともなつた、ちがった生活の場をもっている」。すなわち、「生活形を異にした社会は、その生活の場を異にしている」ということを示している。生活形と生活の場について一応、論定したことで、今西は「棲み

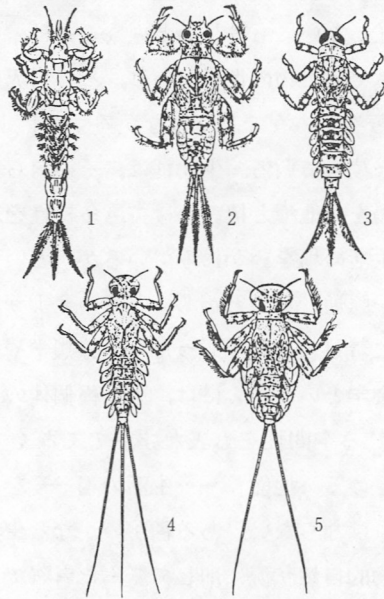


図 1. カゲロウ幼虫の生活形 (今西錦司『生物社会の論理』1949 より)

1. 埋没的生活形 (*Ephemera lineata*)
2. 潜伏匍行的生活形 (*Ephemerella basalis na*)
3. 自由遊泳的生活形 (*Ameletus montanus*)
4. 弱滑行的生活形 (*Cinygma hirasana*)
5. 強滑行的生活形 (*Epeorus hiemalis*)

わけ原理」を措定する。「生活の場がちがえば、その生活様式がちがってくるべきだ、ということから、生活形と生活の場とを結びつけ」て、種は互いにその生活形に合う生活の場を棲みわけている、ということができる。「これを生活形の棲みわけ原理という」。

この原理の基本的根拠となっている、カゲロウ幼虫の生活形について述べる。これはその後の今西を方向付けるものとしても非常に重要であるため、詳しく論じることにした。

表 1-1. 底質に応じたカゲロウ類の生活形

| 底質  | 泥, 細砂    | 小石   | 礫     |
|-----|----------|------|-------|
| 生活形 | A- 埋没的   |      | 潜伏匍行的 |
|     | B- 自由遊泳的 | 弱滑行的 | 強滑行的  |

表 1-2. 生活形の 5 類型とカゲロウ 7 科の関係

|       | 生活形   | 科名                            |
|-------|-------|-------------------------------|
| A- i  | 埋没的   | Ephemeridae, Potamanthidae    |
| ii    | 潜伏匍行的 | Ephemerellidae                |
| B-iii | 自由遊泳的 | Baetidae, Siphonuridae        |
| iv    | 弱滑行的  | Leptophlebiidae, Ecdyonuridae |
| v     | 強滑行的  | Ecdyonuridae                  |

表 1-3. カゲロウ類の生活形社会の 4 類型

|       | 生活形社会                                 |
|-------|---------------------------------------|
| A- i  | Ephemeridae-Potamanthidae 社会 (埋没的)    |
| ii    | Ephemerellidae 社会 (潜伏匍行的)             |
| B-iii | Baetidae-Siphonuridae 社会 (自由遊泳的)      |
| iv    | Leptophlebiidae-Ecdyonuridae 社会 (滑行的) |

まず、今西はカゲロウ幼虫が、水底質という生活の場のちがいに応じて、それぞれ種が棲みわけていることを認知する (図 1)。その底質は、泥、細砂のもの、小石、そして礫質という三つに大別でき、それらに対応する生活形の相違を示したものが、表 1-1 である。この生活形の相違と、分類学上の類別とを比較してみたものが、表 1-2 である。明らかに、生活形の分類と分類学上の分類とは、必ずしも一致しないことがわかる。だが、この不一致を矛盾とみるのではなく、Ecdyonuridae を媒介にして、弱滑行形と強滑行形を一つとすることによって、一つのまとまった生活形社会となりえていていると考えるのである (表 1-3)。

分類学的位階から科の上の亜目をみると、カゲロウの生活形社会は図 2 のようになる。亜目に従って Baetoidea 社会が考えられそうであるが、Baetoidea は系統発生上の分類学的カテゴリーであって、その四つの科が「もとは

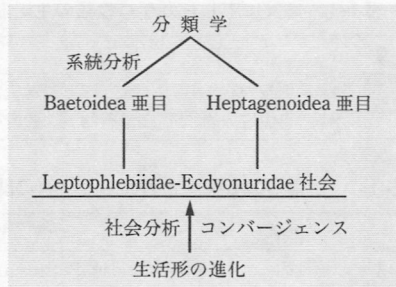


図2. カゲロウ類の系統分析と社会分析による類型

一つの祖先から出たということを表わしただけのもの」であり、かつては「一つの生活形社会をつくっていた、と翻案」することもできるが、「その社会が膨張して、ちがった生活の場にまではみ出していった」とすれば、生活形のちがいが当然生じることになり、「生活の場の棲みわけをとおして、二つの生活形社会に分離したことを意味する」のである。

ここにおいて「社会の分離は血縁の分離〔進化〕であり、したがって形態の分離である」〔<sup>1</sup>〕内は引用者〕という今西テーゼが成立する。今西はこのカゲロウの社会膨張を、コンバージェンス convergence する方向の好例とみる。典型的な具体例として、Leptophlebiidae-Ecdyonuridae 社会において、分類学的にみると、Leptophlebiidae は亜目 Baetoidea に、Ecdyonuridae は亜目 Heptagenioidea に属する。「このようにもともと系統的にちがったものであるにもかかわらず、両者が一つの生活形社会をつくるようになったということは、両者が同じような生活の場を占めているうちに、同じような生活形をとるようになった」ということになる。生活形の進化における、ダイバージェンス divergence の方向ばかりでなく、コンバージェンスの方向が明白にされる。ダイバージェンスなくしてコンバージェンスはなく、その逆もまた成り立つといえる。つまり、一方でダイバージェンスの方向に進むに従い、生活形社会を通して、その方向はコンバージェンスの方向と交わり一致するのである。

初め大きく分岐したものが、年月を経るにつれ、さらに分岐をくり返し、結局、系統的には相違していても、それらの間に相似関係が生じるわけである。哺乳類は遠く昔に、魚類と分岐したものだが、哺乳類がその内でさらに種分化をくり広げていく中で、クジラという魚類に似たものを生んだ。クジラは他の哺乳類のどれよりも、魚類と生活の場を同じくし、生活形も似ている。これもまた、ダイバージェンスとコンバージェンスの表裏一体性の結果である。種分化は常にこの要素をもつ。コンバージェンスの方向は、つまりは同一の生活の場を、系統的にはいかに離れていようとも、共存的に生活し、棲みわけていくことによって生起される。生活の場が社会的空間となるように、コンバージェンスは他種間との関係を決定する作用であり、その種自体の社会の性質を現出する。コンバージェンスは進化の問題ばかりでなく、その結果としての社会構造とも重要な繋がりをもつのである。

そして、「分類学が系統分析に用いる手段が、いつもそのまま社会分析に役立つ」つのではなく、生活形を問題とする社会分析は、社会学によって解明されるものである、と結論している。

今西はその社会分析を進めて、Leptophlebiidae-Ecdyonuridae 社会を詳細に分析する。つまり、生活の場をより明確に分析することによって、ここでは水底質が大磯か、小石かということで、二つの社会に区別することができる。それは小石の底に棲む Leptophlebiidae-Ecdyonuridae 社会 (*Epeorus* と *Ecdyonurus* の大型を除く) と、大磯底に棲む Ecdyonuridae 社会 (*Ecdyonurus* の大型種を含む) となる。科 Ecdyonuridae が二つに分けられるということは、先の表 1-2 の B-iv の弱滑行的生活形と、B-v の強滑行的生活形のちがいを反映するものとなる。

Leptophlebiidae-Ecdyonuridae 社会と Ecdyonuridae 社会は、それぞれについて、さらに、生活の場によって区分けすることができる。すなわち、水流の遅速によって、生活の場の棲みわけがみられるのである。ここで、ようやく今西は Ecdyonuridae 社会から、*Epeorus* 属の種の問題に至る。流速に応

じて、「一つの *Epeorus* 社会というものも、さらにその社会内が、ちがった種によって、ちがった生活の場に棲み分けられている」ということを論じるのである。

賀茂川においては、流速に即して *Ecdyonuridae* 社会（賀茂川は *Epeorus* 社会）だけでなく、*Ecdyonurus* 社会の種も生息するため、*Ecd. yoshidae*-*Ep. latifolium*-*Ep. curvatulus*-*Ep. uenoi* のような配列をするという。これをまとめていうと、「流速の変化に応じて生活の場を棲みわけた、*Ecdyonuridae* 社会の種の配列で」あり、「それが *Ecdyonuridae* 社会における、種の社会の棲みわけである」となる。そして、この結果によって「社会を構成する、属社会なり、種社会なりが、その同じ一つの生活の場のなかに仲よく混在し、共同生活をしている」のではなく、且つ、単なる競争的敵対、対立関係にあるのではないことが明白になる。そして、それゆえにこそ「社会」たるにふさわしい関係が成立するといえるのである。

ここで今西は、「生物的自然の究極的な構成単位である種、具体的な社会単位である種は、いくつかの形態的に相似た種が、相似た生活の場を棲みわけることにより、お互いに相対立しながらも、お互いが相補う立場にたつて一つの生活形社会を構成している。このようにして、一つの生活形社会の構成にあずかるいくつかの種のことを、同位種という。社会という立場からみれば、こうしたいくつかの種の社会は、同位社会である」と整理している。例えば、流速によって棲みわけた、*Ecd. yoshidae* 社会—*Ep. latifolium* 社会—*Ep. curvatulus* 社会—*Ep. uenoi* 社会という、四つの同位社会が *Ecdyonuridae* 社会という一つの生活形社会をつくっていることになる。

そして、同位社会ということは、分類学的位階に応じて成立するものであり、*Ecdyonuridae* 社会と、*Leptophlebiidae*-*Ecdyonuridae* 社会とは、同位関係にあるといえるわけであり、さらに、これら二つを合わせた滑行的生活形社会と、*Baetidae*-*Siphonuridae* 社会、*Ephemerellidae* 社会という四つの社会関係もまた、カゲロウ幼虫の生活形社会の構成単位としての、同位社会で

あるのである。ここで、同位社会というものの関係をより明示するために、今西も同様なことを述べているのであるが、種間の同位関係には「同位種社会」、科間関係の場合には「同位科社会」と細分的に名称を与えることも提案できる。だが、後述するように、私はこのような同位関係の曖昧性には批判的であり、それは種社会間関係においてのみ使用されるべきものと考えている。

水底質、流速とみてきて、今西はさらに、同位社会の配列と生活の場について、突っこんだ考察を加える。つまり、その配列というものは、上流でも下流でも、あるいは九州でも北海道でも同じであるか、という疑問である。それは、水温の相違という生活の場の構成要素が、作用して異なっているものである。

例えば、賀茂川のカゲロウにおいては、上流部に次第にいくと、別種が新しい生活の場を占めるようになっていく。日本アルプス溪流は、急流であることが関連して、*Ep. aesculus* が殆んどを占めるように上流部は単一的である。北海道でも上、下流部の種類数が少なく、上流には *Ep. aesculus* が、下流部には *Ep. uenoi* が優先的に占めている。

賀茂川では *Ep. uenoi* の次は *Ep. hiemalis* であった。が、それは夏期の垂直的配列であり、冬期の *Ep. hiemalis* の場には、*Ep. aesculus* が占めるようになるのである。つまり、*Ep. aesculus* は夏期の京都賀茂川では、水温が高すぎるため、生息できないのであり、「同じ季節に、ちがった生活の場を棲みわけた同位社会ではなく、ちがった季節に、同じ生活の場を棲みわけた同位社会である」と説明できる。また、冬の賀茂川は、*Ecd. yoshidae* が生息せず、*Ep. latifolium* と *Ep. curvatulus* の場には、*Ep. ikanonis* が占めるという。

同位社会は生活の場を相補的に占める関係であり、「大磯を生活の場とした *Ecdyonuridae* 社会が、流速のちがいに応じた棲みわけとともに、水温のちがいに応じた棲みわけをとおして、空間的に広がるだけでなく、この水温

のちがいに応じた空間的棲みわけを、時間的棲みわけとして、同じ生活の場さえ、季節的に棲みわけている」とまとめられる。

さらに、これを同位社会の二つの系列としている。流速に応じた棲みわけによって認められる同位社会の配列と、水温に応じた川の上下の順に位置する配列（これは「高さのちがいを反映した配列」といえるため、一つの垂直分布帯とも考えられる）である。この二系列に、季節的な時間差による棲みわけの結果の配列が、加えられているわけである。

### 三. 複合同位構造と階級社会

全体社会としての生物的自然を構成する究極的単位を、種の社会 (specia) と考えたことを確認して、『生物社会の論理』の第三章「再構成」は始まっている。

この種社会は、それ自体が一つの完結された生活体であるが、互いに離反、対立する関係ではなく、「類縁的によく似た種が、生活の場を棲みわけることにより、それらの種が、お互いに同位社会として、相対立しながらも相補いつつ、そこに一つの生活形社会をつくりあげている」ものとして定位される。

棲みわけは、大地域的なもの（水温、気温のちがい）と、小地域的なもの（流速のちがいなど）とがあって、前者を「第一同位構造」とし、後者を「第二同位構造」ということにしている。例えば、*Ecd. yoshidae* と北海道にいくと *yoshidae* に代わるものとしてみられる *Heptagenia na* との関係は水温差にとるから、第一同位構造で、*Ecd. yoshidae* と *Ep. latifolium* とは流速の差という小地域的なものであるから、第二同位構造ということになる（同じ場所でも時間差による棲みわけの *Ep. latifolium* と *Ep. ikanonis*、あるいは *Ep. aesculus* と *Ep. hiemalis* との関係は、別の同位社会の構造である）。



*Ep. uenoi* と *Ep. hiemalis* は、重複的に同じ石礫上になっておらず、特に羽化期を異にしていることが注目される。发育ステージに差があるのであり、それによって棲みわけている。これは生活史をズラして、同じ生活の場を棲みわけた同位社会なのである。

この関係は、第一、第二同位構造を表わすものではなく（生活形のよく似た種、つまり同位社会として、対立的、非重複的棲みわけをするのではなく）、生活史のズレを通して、同じ地域、生活の場に生息する重複した同位社会であり、これを「複合同位社会（構造）」というとしている。

*Ep. uenoi* と *Ep. hiemalis* は急流部の大礫の表面に生活するが、この生活の場には別に *Baetiella japonica na* もいる。カゲロウ幼虫である *Epeprus* と *Baetiella* 以外にも、ブユやアミカといった異なった目の幼虫も、同礫上に見出すことができる。が、ここにも生活の場のちがいがあはずであり、それを棲みわけているのであり、生活形もちがっている。しかし、それらは昆虫であることにちがいはなく、他の動物社会に対し、昆虫社会という一つの共通基盤をもっている。そこに“同位性”を見出すならば、このカゲロウ、ブユ、アミカ等を昆虫社会として、“高次の複合同位社会”ということができ、原則的な複合同位社会と区別することができるとされる。

しかし、何をもって「高次」とするのかは、この今西の説明からではよくわからない。ただ、カゲロウ、ブユ、アミカという昆虫類をまとめて、すなわち“綱”レベルということで、“高次”とするのか。また、同じ礫で見出されるであろう扁形動物などとの関係はどうなるのか。今西の階層性理論には不十分な点がみられる。

「この複合同位社会を構成する一つ一つの社会は、厳密に言えば同位社会ではない。第一義的な同位社会ではない、けれども、動物社会全体から見たならば、それらはいずれも昆虫の社会であるという点において、他の動物の社会に対し、同じ立場におかれたものである。そういう意味でかれらもまた、お互いに同位社会である」と考えられるという。だが、ここには曖昧な意味の

二重性が含まれている。むろん、この社会（カゲロウとアミカなどの）は、「より原則的な複合同位社会から、区別しなければならない」。しかし、問題は“高次の”という意味である。それは単に、複合同位社会となる類似した種間の関係より、種として類縁的に離れたより大きい分類学的位相、例えば、目間の関係を指すものであり、あるいはまた、それは科間でも、綱間でも成立するものなのかという疑問である。昆虫社会全体からみれば、カゲロウは、蜉蝣類ということから、アミカやブナとは別の類に属し、一つの社会を形成することになるのであろうか。それとも、分類学的類縁にこだわらず、例えば同じ磯で見出されたカゲロウと、プラナリアとの関係も“高次の複合同位社会”といえるのであろうか。このように分類学上の位階でなく、生活の場の共有性を強調すれば、この蜉蝣目と扁形動物の共有的社会は成立することになる。高次の複合同位社会は、カゲロウ社会とプラナリア社会との関係も含まれるというのである。ただし、それは例えば、脊椎動物とは別の無脊椎動物という同じ立場におかれたものとして、同位性をもつということからのものである。

“高次の”ということは、他のものと比べてという頗る相対的な概念であるといえよう。絶対的な高次というのではなく、ある一つの階層において、下の階層からみれば高次になるし、上の階層と比較すれば、これが高次になり、初めはそれより位階が下になる。低次のということになる。そして、この位階上下の比較において、分類学が適用され、社会学における階層性の意味と重要性が明示される。

植物社会においては、喬木社会や草本社会が高次の複合同位社会ということになる。森林の中には、広葉樹も針葉樹も含まれていたり、常緑樹も落葉樹も含まれている場合もある。また、草木原でも禾本草 *grass*、広葉草本 *forb*、ヨモギ類 *sage* が混在していることがある。このようなちがった生活形社会の混合からなる集団もまた、一つの高次の複合同位社会といえるものである。しかし、それも喬木社会ももとは草本社会ということで、同位性を

見出すことができ、その段階においてそれらの社会のそれぞれは、同一の生活形であるといえるのである。

内蒙古において草原は、禾本類のシバムギモドキとノゲナガハネガヤ、ヨモギ類のマンシュウアサギリソウが優占的に生息している。シバムギモドキは平坦地に、ノゲナガハネガヤは斜面に優占的で、さらにその上方にマンシュウアサギリソウが占めている。が、ノゲナガハネガヤや、マンシュウアサギリソウは平坦地にもよくみられる。そこで、今西は、斜面や丘上は乾燥度が著しくなるため、環境条件がよいとはいえぬと、生活の場に関する条件に言及する。つまり、その条件の悪いところへいけばいくほど、定着生活する種は当然、減ずることになる。内蒙古の丘上においては、シバムギモドキがまず最初に落伍し、斜面はノゲナガハネガヤが、その上はマンシュウアサギリソウが最優占権となるわけである。

しかし、このような空間的棲みわけは、時間的な棲みわけとなっても現われる。すなわち、年によって降水量の差が、優占権の状態に大きく変化を及ぼすのである。環境条件のよい年は、シバムギモドキが占めている場所へも、それが悪い年には、シバムギモドキにかわって、ノゲナガハネガヤや、マンシュウアサギリソウが入り込んで、優占的になったりするのである。だが、これをシバムギモドキと、ノゲナガハネガヤもしくはマンシュウアサギリソウとの抗争とか、競争とかいうふうに解するのでなく、条件が変れば優占するものも変る、という一定の秩序を示すものと看做し、ここに“順位”があると、今西は表現する。今西によれば、順位は環境の変化によって変るものであり、永久絶対的なものではないことになる。どんな環境でも生息できる生物種が一種として存在せず、種ごとにそれぞれの生活の場をもち、そこにのみ生活している以上、ここでいう順位とは、当然的に生じる種間における、生活の場を経済的に有効に使用するための調節機能といえよう。

これは、日本アルプスの喬木社会におけるシラビソ、オオシラビソとコマツガという同位社会の間や、大興安嶺の喬木社会での乾燥度によるカラマツ

三種間の関係にもみられる。これらの順位のある複合同位社会では、「環境が許せば、お互いに混在しうものでも、環境条件が悪くなりだすと、それぞれの種によって異なり、その結果、「生活の場に対する要求が、はっきりとして」きて、棲みわけが成立するのである。ここにおいて、「種の分布限界というものは、絶対的なものでなく、それと境を接する同位種に対して、相対的なものである」ということが明白になり、棲みわけの意味がよりはっきりする。むろん、種の分布限界が絶対的でないといっても、ゾウが南極にいても不思議ではない、ということは意味しない。これは棲みわけする同位種社会間での境界の絶対性への否定をいうものであって、生活の場と種との関係が、密着的に重要であることを意味するからである。

しかし、熱帯降雨林において、順位ある複合同位社会は成立しているか。今西は順位のないものとして、この例を挙げ言及する。環境条件が植物にとって最適といえる熱帯降雨の地域では、多くの種が混在している。この地域では、適応とか淘汰とかが働く余地がなく、問題にならぬといえ、とするならば「優占度のちがいがいいということも、また生じてこない」ことになる。そして種が極度に多様化してくるのである。

この熱帯降雨林の喬木社会の構造は「やはり、一つの高次の複合同位社会である。しかし、それを構成する同位社会のあいだに、順位のない複合同化社会である。順位はないけれども、抗争のおこらぬ社会である。棲みわけはないけれども、混乱のおこらぬ社会である。われわれはことに、種の分化よりも適応のほうさがきに立っていた、内蒙古の草本社会や、大興安嶺の喬木社会に対して、種の分化のほうが適応よりもさがきに立った、成因的にちがう社会をみるのである」。これはすなわち、棲みわけ原理が適用できない、その限界ということである、と自述しているのである。

喬木と灌木と草本との共存にも、棲みわけが成立しており、複合同位構造を成し、一つの高次の複合同位社会を形成している。喬木社会などそれぞれの複合同位社会は、順位のある同位社会から成っているが、喬木や灌木など

から成る複合同位社会には、その社会間で順位が断たれている。そこで、喬木社会と灌木社会とは、“階級”のちがった社会である、ということとしている。つまり、「喬木社会と灌木社会もしくは草本社会の重複した森林」は、これは生活形社会としてみるならば、それぞれに高次の複合同位社会であるものが、さらに重複した「複合同位社会である」。そして、「森林は、生活形社会として、階級構成を現わした一つの複合同位社会であり、一つの“階級社会”である」ということになる。森林は喬木社会が優占社会となっている一つの階級社会ともいえるのである。今西は、次にすべきことは、階級社会の配列を社会的にどうみるかであるとしている。

大興安嶺では低幹草原、中幹草原、森林と並んでいるが、これは乾燥度という環境条件の傾度に応じて配列している。換言すれば、「乾燥度のちがいに応じた階級社会のあいだの棲みわけである」となる。その棲みわけの配列には一定の秩序があり、乾燥の弱い方へいくに従い、社会の階級的次元が高まるようになっていく。乾燥度が高いことは「植物の生活の場として、立地的環境条件が悪い」ことであり、“土地価”が低いということである。環境条件の悪いところは植物種が少なくなってくるから、「土地価の低いところほど、階級社会の発達は貧弱である」ことになる。

土地価のちがいは、浸量や乾燥度のちがいによる大地的なものばかりを示すものではなく、小地的にもみられ、発達の程度のちがう階級社会を作っている。従って、階級社会の棲みわけには、二つの系列があることになる。そこで、気候のちがいを反映した大地的な土地価に応じた棲みわけを、“第一段階構造”とし、小地的な場合を“第二段階構造”ということにしている。

「階級社会というのは、一つの高次同位社会としての、喬木社会とか、灌木社会とか、あるいは草本社会とかいったものが、部分社会となって、それらがさらに複合したところのいっそう高次の複合同位社会を意味する、一つの全体社会である。そして、階級とは、かかる全体社会における部分社会とし

ての、喬木社会、灌木社会、あるいは草本社会を指すのである」。この社会間には、「順位のある同位関係ではなくて、階級関係」があるともいえる。

今西は、この階級社会を動物に適用するとき、食う食われるものの関係と混同してはならぬとする。「木の葉を食うという点で、哺乳類のゾウやキリンも、昆虫であるイモムシやケムシも、あるいは軟体動物であるカタツムリも、みんな同じ階級に属すること」になってしまうからである。むしろ、食物連鎖関係は同位関係を源としている場合も少なくないともいえるのである。また、食物連鎖は生物人口の問題と密接な関係にあるとされ、ゆえに生態学者に重要視されるが、その個体数というものは、食物連鎖上の段階や人口ピラミッドの位階によって規定されるのでなく、「まずその動物の、動物社会もしくは生物社会において占める、系統上の、あるいは進化史上の、地位によって決定する」のでは、と定位されている。

現在において、動物社会と植物社会、あるいは昆虫社会、魚社会、哺乳類社会はそれぞれ独立した生活形社会であって、その間に同位関係は認められず、且つ階級というものでもないといえる。ここには「系統的、進化史的な位階の異なった、それぞれの価値体系の世界の内に、生活している」ことが表明されている。

系統的、進化史的な位階の高い大型哺乳類と、昆虫のような小動物とは、その棲みわけ方がちがっているとして、例えば、昆虫には川辺林、湿原、灌木原、マツ林といった植物社会の棲みわけに合致した棲みわけがみられやすいが、シカのような大動物には、植物社会のそれに即した棲みわけはみられず、複数の植物社会にまたがっている。シカによって「要求される生活の場の広がりの中には、草原も灌木原も森林もみなふくまれ」るからである。そして、シカは大地域的にだけ棲みわけのため、第二同位構造は認められないのである。

このことは「植物的な価値体系もしくは自然利用体系というものは、動物においても、変温動物のすむ価値体系なり自然利用体系なりになら、ある

〔研究ノート〕今西錦司『生物社会の論理』から：学説とその検討 (1) (森)

程度まで通ずるものである。しかるにそれが、恒温動物であるシカになると、通じなくなるということは、「動物の進化史において、変温動物から恒温動物への進化にともなった、機能上の変革が、その動物のすむ価値体系なり、自然利用体系なりのうえに——少なくとも、その動物の土地評価のうえに——大きな変革をもたらした」ことを意味する。すなわち、恒温動物と変温動物とは、系統的、進化史的に位階を異にするだけでなく、社会構造的に、土地評価の変革によって、その間に階級社会として認められぬ断続があるのである。これを今西は、“社会水準”のちがいとしている。

(つづく)

〔参考文献〕

- (本文中に引用を必ずしもしていないが、大いに参考にしたものを含む)
- 今西錦司 1974 今西錦司全集全10巻、講談社、特に『生物社会の論理』を所収した第4巻
- Imanishi Kinji 1939 On the altitudinal regions of the northern Japanese Alps. Bull. Biogeograph. Soc. Japan 9: 133-144
- 桑原武夫 1966 今西錦司論序説、今西錦司博士還暦記念論文集、中央公論社
- 森 誠一 1987~1988 今西社会論序説、生物科学、連載、岩波書店
- 森 主一 1952 すみわけ概念の整理、生理生態、5: 51-57、京都大学
- 大串龍一 1985 今西学派の系譜、金沢大学教育開放センター紀要、5: 55-67
- 谷田一三 1985 溪流の生態、科学サロン、35: 7-15、東海大学出版会
- Weaver, J.E. and Clements, F.G. 1938 Plant Ecology, New York